

オーストラリア春季短期留学プログラムの 第2言語習得と異文化適応

— 学生は5週間の語学学校とホームステイから何を得たか —

杉橋 朝子・セージ, クリスティー・宮房 寿美子

An Australian Cross Cultural Language Program:
The influence of study and home stay for 5 weeks

Tomoko Sugihashi, Kristie Sage and Sumiko Miyafusa

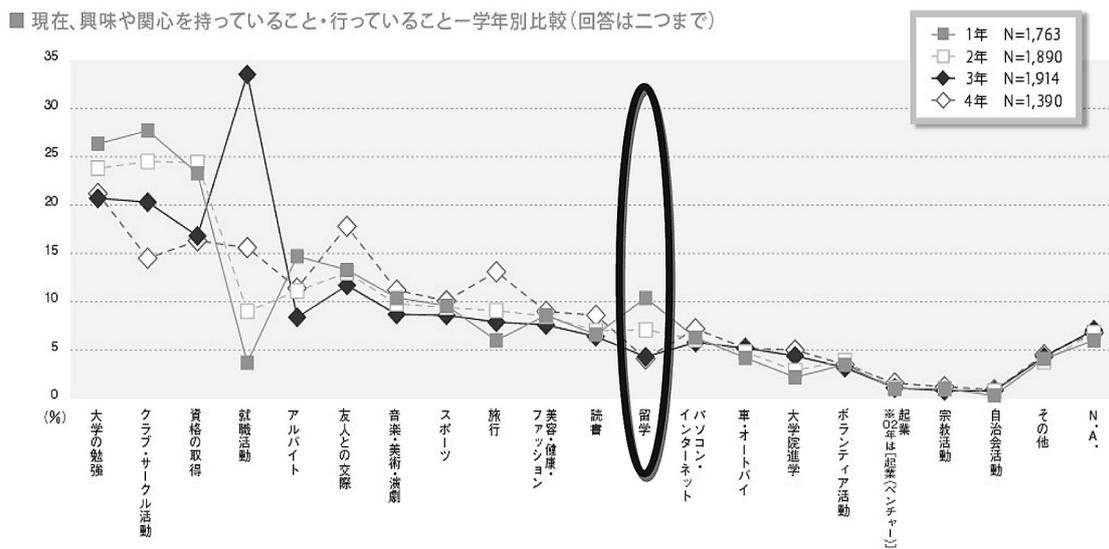
Abstract

This paper investigates a five-week study abroad and homestay program undergone by Showa Women's University (SWU) students from various faculties and years in early 2013 at the Institute of Continuing TESOL Education, University of Queensland (ICTE-UQ), Australia. Prompted by OECD results which showed a trend that Japanese students' interest in study abroad programs is decreasing; research sought to identify from the students who participated in this program their perceived language skill improvement and language contact experiences. Feedback was sourced from a questionnaire administered by Google Forms and student reports submitted to the Centre for International Exchange (CIE). Despite an initial culture shock, and concerns with English proficiency, students developed strategies and drew on unfamiliar support systems to overcome communication issues in their multicultural learning and living environments. From this immersion, positive feedback was received regarding perceived language skill improvement, particularly for listening and speaking. Although questionnaire results do show some dissatisfaction, mainly regarding the population of Japanese students at the language school; overall, these multicultural learning and living environments had a positive effect on students' perceived English language improvement and enhanced their motivation towards communicating in English. These results indicate that short term study abroad is considered beneficial by SWU students for language skill improvement and language contact experiences. Furthermore, this paper argues that such benefits are noteworthy for SWU students in the larger context of Japanese society since English communication strategies will be required for future international events, and due to the recent revitalization of study abroad as part of Japanese education by the Abe Government. Related also is SWU's focus on globalization. Therefore, SWU students who undertake study abroad are expected to have a positive experience in regards to a heightened perception of improved language skills and language contact proficiency, coupled with an international capability.

Key words: *short term study abroad* (短期留学), *language skills* (語学スキル), *language contact experience* (言語接触経験), *multicultural study and living learning environments* (多文化研究と生活環境), *immersion* (イマージョン), *language proficiency* (言語運用能力), *internationalization* (国際化)

はじめに: 留学の傾向

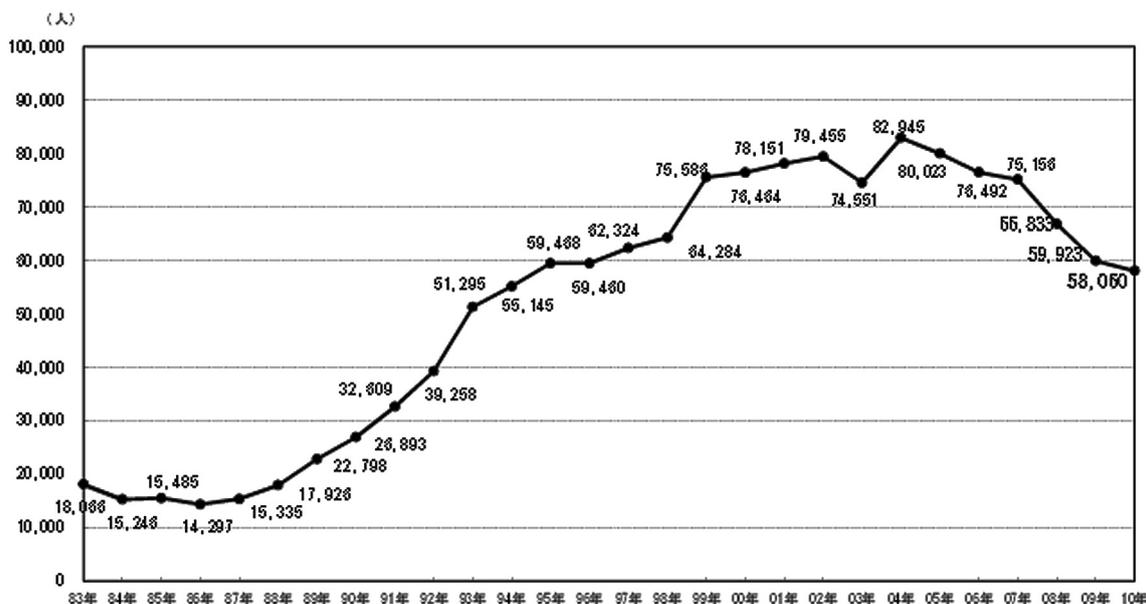
ひと頃「若者の内向き志向」が話題になっていた。図1は、大学生7千人が2010年に「現在、興味や関心を持っていること・行っていること」の問いに回答した調査結果だが、この傾向を裏付けるように留学への興味は、最も高い1年生が10%、3, 4年生では4%となっている。



日本私立大学連盟 (2011)

図1. 大学生の興味や関心

OECD等の調査では、図2のように、海外留学者数の推移が2004年の約83,000人から2010年の約58,000人まで、右肩下がりが続いている。



文部科学省 (2013)

図2. 日本からの海外への留学者数の推移 (1983年~2010年)

安倍内閣は2013年6月に「日本再興戦略」を打ち出し、「意欲と能力のある若者全員への留学機会の付与」として、2020年までに日本人留学生を倍増させるとしたが、まずは海外に興味を持つきっかけ作りが必要になるだろう。

本学では英語コミュニケーション学科（以下、英コミと略記）と現代教養学科以外の学生は、第2外国語を8つの外国語（英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、中国語、韓国語）から選択することになっているが、2013年度のこれら2学科を除く新入生714名のうち、95%が英語を選んでいる。身近になった留学を推進し、学生には国際教育も含めた実践的な体験を望みたい。春休みを利用しての留学であれば、時差の殆どないオーストラリアやニュージーランドへの留学が特に効果的と思われる。

ICTE-UQ プログラムの概要

ICTE-UQ (Institute of Continuing & TESOL Education, University of Queensland) とは、クイーンズランド大学附属英語学校であり、ホームページでは、「アウトドアのライフスタイルと、多彩なエンターテインメント、レクリエーション、観光や交流イベントが選べる」ことを強みとしている。例えば「学生は定期的に企画される週末のグループイベント」に参加でき、更に「金曜午後の無料スポーツや映画クラブ、ICTE-UQ サッカーチーム、合唱団など様々な ICTE-UQ 学生向けアクティビティに無料」或いは、「UQ の各種スポーツクラブや趣味のクラブに低料金で」参加することができる、としている。

またブリズベンは「比較的安い生活費」で「現代的で安全な都市環境」とあることから、留学生たちは放課後も活発に活動できるのではないかと想像できる。

1. 研究の目的

本研究では、ICTE-UQ への2013年春季短期留学を経験した本学生へのアンケート結果と留学後のレポートから、学生の参加理由を始め、何を学び体験するのかを明らかにし、今後の学生生活および、英語学習にどのように留学経験が影響を与えるかを考察する。

具体的な研究課題は以下の通りである。

1. 5週間でスキルの向上はあったか。
2. 言語接触 (language contact) はどのようなものがあり、英語力に影響したか。
3. 語学学校での異文化体験はどのようなものがあり、カルチャーショックがあったか。
4. ホームステイでの異文化体験はどのようなものがあり、カルチャーショックがあったか。
5. 5週間の体験でどのような変化を自分に感じ、今後活かしたいと思うか。

2. 先行研究

留学を通しての研究は国内外を問わず数多くされているが、対象プログラムは1 Semester (3ヵ月) から1年が非常に多く、当該プログラムのような短期留学における効果は明確に検証しにくいと予想される。しかしながら、女子大学生1年生の3週間の北米研修では、アンケート調査により、学生自身が感じるスキルと北米人・社会に対する意識の両方の向上が観察されている (Kitao 1993)。また、客観的な分析を行った研究としては、吉村・中山 (2010) が大学生と大学院生の3週間の夏期英

語研修プログラムの英語力向上の成果を本にまとめているが、留学直後と修了後の2004年から2008年の5回のミシガンテストの結果から以下のように考察している。

3週間という短い期間ではあるが、「論理的に表現する学習」については効果があったという結果が実証できたのに対し、他の言語スキルについては短期間で大幅な向上は難しいことが分かった。つまり自分の考えを直ちに整理し、それを「英語の論理」で表現する学習は、毎日英語を使用するような環境において実践すれば、短期間であっても大きな成果を上げることができることが証明されたことになる (p. 49-50)。

3ヵ月以上を対象としたものは、語彙やある場面を想定した表現の習得を含む、4スキルの第二言語習得 (SLA) の成果を留学の前後、或いは留学グループと留学しないグループの伸長の差を比較し研究しているものが多い。当然ながら使用頻度の高いリスニングとスピーキングの伸びが顕著で、スピーキングに関しては正確さよりも流暢さや自然な発話の伸長がより多く観察されている (Freed 1998, Coleman 1997 など)。リスニングに関しては、英コミの留学前後の TOEIC の点数の伸びを見ても結果が確認されている。金子・高味 (2009) によると、18ヵ月コースの留学開始直後1学期の伸びは、Reading が6.2% に対し、Listening は10.0% である。更に、伸長の度合いと学生の性格、動機、社会的スキルなどの個人の要因との相関を測るなど (Brecht, Davidson & Ginsberg 1995, Midorikawa 他 2009, Robson 他 2007, 八島 2004 など) 幅の広い研究が行われている。また、DuFon・Churchill (2006) や Freed (1995) は留学における様々な研究を編集した論文集を出版しているが、日本にホームステイした大学生に関する研究では、言語習得の研究 (Huebner 1995, Marriott 1995, McMeekin 2006) だけでなく、ホストファミリーとの会話を通して日本社会にある「日本人論」や協調主義、女性差別の意識を観察した論文の掲載がある (Siegal 1995, Cook 2006, Iino 2006)。ジェンダーの差別意識に対しては、ロシア語留学は「男子学生に有利な環境」であるという研究 (Polanyi 1995, Brecht & Robinson 1995) もあり、個人要因だけでなく留学先の社会、文化要因も当然ながら SLA に大きく関わっていることが明らかである。

金子・高味 (2009) は帰国後まもない英コミ学生にアンケート調査をし、留学の効果をまとめているが、それによるとボストン留学中に特に力を入れて学習したのは、5ヵ月留学組が Speaking (80.2%) と Listening (79.2%) と答えたのに対し、18ヵ月留学組の学生は Speaking (100%) と Writing (97.0%) と Productive スキルの伸長に努力をしている。留学の長さによってどの力が不足しているのか、体験が異なるようだが、「特に上達したスキル」は、両コースともリスニングと答えている。

同研究では意識の変化も学生に尋ねており、最も成長があったのは、5ヵ月組が協調性 (79.2%)、18ヵ月組がおしなべて全体 (責任感、協調性、自主性、忍耐力、ボランティア精神) に人間的成長が見られたと回答している。また、Sugihashi (2009) はカルチャーショックと帰国後の逆カルチャーショックについて、同学科の特徴のある異文化体験を明らかにした。つまり、Adler (1975) 他、多くの研究者が異文化の適応には順応と失意を繰り返すと分析しているが、それが見られず異文化適応が比較的順調であった。それは Tanaka・Ellis (2003) が “Japanese College Overseas” と留学の形態を名付けたように、学科単位で寮に留学する形態が異文化接触を制限しカルチャーショックを和らげたと考えられる、というものである。

3. 研究方法

調査対象学生:

本プログラムには、昭和女子大学から合計 16 名参加しており、学科別参加人数は、日本語日本文学科 3 名、英語コミュニケーション学科 2 名、歴史文化学科 1 名、国際学科 2 名、現代教養学科 4 名、環境デザイン学科 4 名であった。学年別で見ると、1 年生 5 名、2 年生 9 名、3 年生 2 名となる。

参加学生は初日にスピーキング、リスニング、リーディングのテストを受け、レベル別クラスに分かれて授業を受けた。クラスは、レベル 1 (Pre-elementary: CEFR A1 に相当) からレベル 7 (Advanced: CEFR C1 に相当) までの 7 レベルに分かれており、参加学生のクラスは以下の通りとなる；レベル 2 に 1 名、レベル 3 に 7 名、レベル 4 に 7 名、レベル 5 に 1 名。つまり、レベル 3 と 4 に集中していたことになる。16 名以外にも日本人学生がいたことを考えると、1 クラスあたりの日本人集中度は高かったことが窺える。また、当該語学プログラム案内によると、レベル 4 以上の学生に全 9 クラスからなる選択授業の学習を可能としていることから、半数の学生は希望に合わせた英語クラスを学習したようだ。

プログラムの期間は、2013 年 2 月 18 日から 3 月 22 日の 5 週間で、日本出発は 1 日前、帰国は 1 日後であった。全員が一般英語コース (General English Course) を受講した。このコースは、ICTE-UQ ホームページによると、コンピュータを用いた学習 (CALL) や録画済みの TV 番組を用いた学習 (Audio-Visual) などにより英語の 4 スキルを学ぶものである。

授業は月～金の 5 日間で、学生の時間割、スケジュールは表 1 の通りである。

表 1. 週間スケジュール

	月～木曜日	金曜日
1 限目	9:00-10:45	9:00-10:45
休み	10:45-11:15	10:45-11:15
2 限目	11:15-13:00	11:15-13:15 (終了)
昼休み	13:00-14:00	
3 限目	14:00-15:45 (終了)	

調査方法:

本研究では、以下の二種類を使用した。

1. 学生が CIE (国際交流センター) に提出した留学後のレポート
2. Web (Google Form) を用い、UpShowa を通じて回答を呼びかけたアンケート

留学した上記 16 名のうち、レポートは全員から、アンケートは 14 名から回答を得た。

レポートは 3 月 23 日から 4 月 4 日付で、殆どのレポートは 4 月 3 日或いは 4 日付である。帰国後 2 週間以内に全ての回答を得たことになる。学習成果について「①留学、学習、国際理解への意欲は研修参加前と参加後でどう変わったか、②海外留学への関心がどう高まったか、の 2 点を盛り込んでレポートを書く」よう指示があるが、一人を除いて A4 に 1 枚 (500 字～1000 字) で回答している。記名式である。

アンケートは4月24日に配信し協力を求めた。選択肢と自由表記の回答を問う無記名式で、合わせて42問である。5月1日までに12名が回答し、5月18日までに2名から回答があった。質問と選択式の回答結果は付録に載せた。

4. 結果と考察

レポートとアンケートに分け、それぞれに見られる英語スキルと文化体験についての反応を以下に記す。文化体験は日本の文化と他の文化への気付き全般を含めて観察する。

4-1 レポート: 英語スキル

目に付くのは、英語が好きになった、英語力を伸ばしたい、英語力の必要性を感じ勉強を続けたい、という学生の強い自覚である。ある学生は、「留学前は『英語を勉強すること＝受験勉強』で嫌々勉強していたが、英語力を高めて留学中お世話になった人たちに自分の気持ちを伝え恩返しをしたい」と述べている。将来についても、全員が英語を使用した仕事（或いは海外での仕事）に就きたい、或いは、留学にまた行きたいと抱負を述べ、積極的な意見ばかりということも注目に値する。日本文化を伝える仕事をしたい、という意見もある。努力の結果、英語で理解し理解される喜び、または表現できなかった悔しさを感じた結果と推察できる。授業の後は家でホストマザーと会話し、「英語漬けの毎日」を送り、「必死で聞き」、聞く力が伸びたと感じている学生もいる。別の学生は、「子供のいない家族だったため会話が通常の速さで」行われ、当初は聞き取れなかったことも多かったが、「リスニング力が自然に高まりホストファミリーの会話が理解」できていった様子を書いている。ホームステイでは日本語を使うことはなく、「英語を学ぶには最高の環境」と書いた学生もいる。

次に多く見られた言葉は友人、クラスメートである。周囲の留学生に助けられ、勉強を続けることができたと伝えている。的はずれな回答をしたり質問をした際に、クラスメートや先生が丁寧に教えてくれた、というものだ。また、特定の友人に感謝の気持ちを述べているものもある。例えば、クラス内の韓国人の友人の意識が高く刺激を受け一緒に頑張った、或いは「ホームステイ先の中国人の留学生に励まされ毎晩のように会話をしてくれたお陰で」他の人の英語も聞き取れるようになった等である。これらのクラスメートたちとはその後も連絡を取り、会う約束もしていることから、当然のように英語でのやりとりは続いていると思われる。

語学学校では、他にも「レベルが適切だった」、「先生が面白い」、「議論を交わす勉強方法でコミュニケーション方法が鍛えられた」と大半が良い評価の一方で、問題点の指摘もある。一番の問題は、日本人が学校内に多かった点である。「クラス14人中11人が日本人だったため他の3人に積極的に話しかけた」と柔軟に対応した学生もいたが、「日本語で話してしまった」、「カナカナ英語でも通じてしまう」との意見もある。また、授業中の先生の英語がわかり易すぎたため、「ホームステイ先や校外で使われている英語とのギャップを感じた」と嘆く意見もある。

4-2 レポート: 文化体験

レポートに書かれた異文化体験やカルチャーショックについての意見を観察する。他国の文化には学校やホームステイを通し触れているが、特にクラスメートとの接触で興味が湧いた、本当の外国を知った、視野が広がった等があり、外国に対する興味が高まったようだ。「自国の文化を説明できなかった」、「外交や世界情勢の意見を求められても伝えられなかった」のように自分の知識不足を嘆く意見も見られる。また授業中の態度について、日本人は発言が少ないことに驚き「発言力」を養いた

いとする意見や、授業中はすぐ質問、発言し「積極性と度胸が身に付いた」という意見があり、日本の講義形式の授業との違いに対応した姿が見える。ホームステイ先では交流すること自体に意義があり、以下に述べるパンの食べ方以外は言及がなく、特に大きなカルチャーショックはなかったようだ。これは、メディアなどを通して、オーストラリア文化についての前知識があったためと思われる。

具体的な異文化体験としては食生活とメディアに関するものが多く、例えば、宗教上豚肉を食さない友人がいるグループで豚骨ラーメンを食べに行き反省した、ホームステイ先ではパンを食べる時もフォークとナイフだった、ファーストフードとして寿司文化が幅広い年齢層の人に愛されていると知った、中国人のクラスメートと尖閣諸島問題について話し、報道で伝えられている事実と違う発見があった、中東には怖いイメージを抱いていたが友人たちは非常に友好的と知った、などである。

以上 CIE に提出されたレポートの記述をまとめたが、留学が充実し成長を実感していると分かるものばかりである。次にアンケート調査の結果を記す。

4-3 アンケート: 英語スキル

スキル向上(質問1~8)について、表2は学生が留学前後のレベルを1から10で自己評価した結果である。数値は人数を表す。例えば、プログラムに参加する前の Listening はどの程度だったか、という質問に対し、自己評価がレベル「2」と答えた学生が3人いたことを示している。

表2. 留学前後の英語レベル

レベル指数	留学	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Listening	前	0	3	5	0	2	1	1	2	0	0
	後	0	0	0	2	3	2	2	3	2	0
Speaking	前	1	6	2	0	2	1	2	0	0	0
	後	0	0	2	0	2	4	3	2	1	0
Reading	前	0	0	4	5	2	3	0	0	0	0
	後	0	0	0	4	2	5	2	1	0	0
Writing	前	0	2	5	3	2	2	0	0	0	0
	後	0	0	2	4	2	3	3	0	0	0

全てのスキルにおいて数値が上昇しているが、特にリスニングとスピーキングでは留学の結果、「9」をつけた学生がおり、自信をつけた様子が分かる。また、ライティングの効果はそれほど自覚できなかったようである。スキル別の変化を分かりやすくするために、図3で視覚化した。濃い色は留学前、薄い色は留学後である。

リスニングとスピーキング力の山が、特に留学後右側に大きく移動しているのが分かる。また、両スキルに対して留学以前は「3」または「2」を頂点に高くそびえる様子から、自信がなく苦心した様子が見て取れる。これに対して、リーディングとライティング力は上達はしているものの、伸びは少なめである。

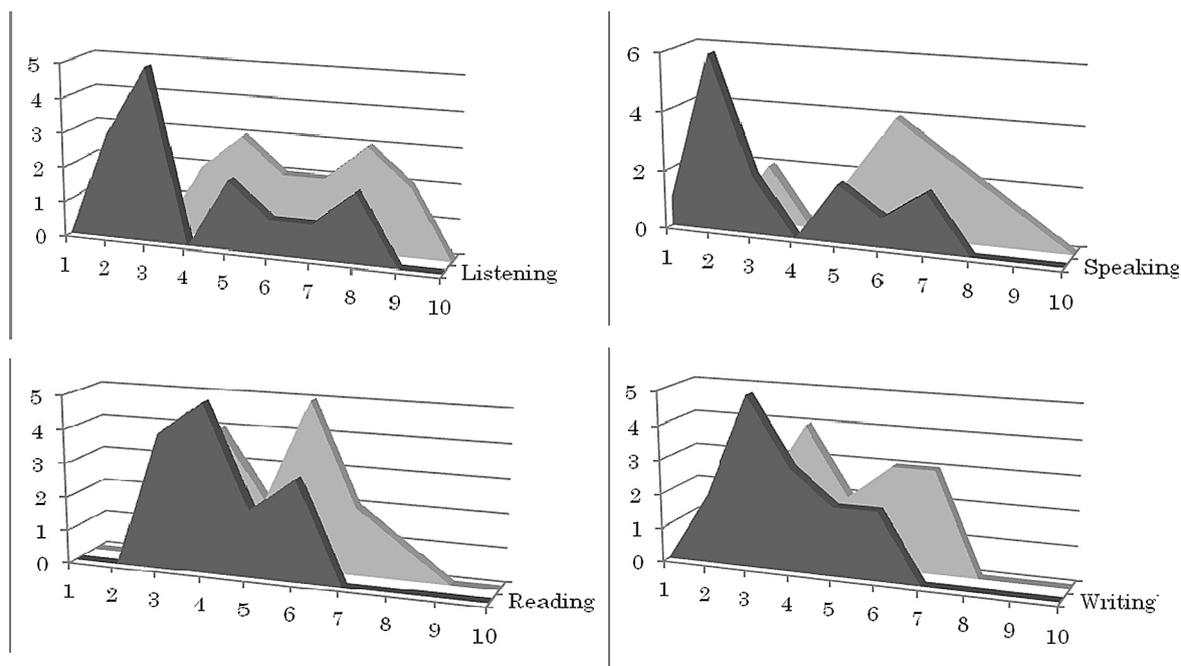


図3. 留学前後の英語レベル (薄い色が留学後)

5. 検定結果

表3は、各スキルの変化について平均値の差を有意水準5%で両側検定の t 検定により検討したものである。全てのスキルにおいてこれらの平均値の差は有意であった。

平均値の上昇が示すように、客観的数値ではないものの、特にリスニング -2.21 とスピーキング -2.64 の向上が目覚しい。当初の戸惑いや不安が5週間で自信と喜びに変わった様子が窺える。

表3. 対応サンプルの統計量と検定

小数点第四位を四捨五入

	留学	平均値	平均値の差	標準偏差	t 値	自由度	有意確率 (両側)
リスニング	前	4.286	-2.214	2.199	-6.318	13.000	0.000
	後	6.500		1.743			
スピーキング	前	3.500	-2.643	2.066	-6.187	13.000	0.000
	後	6.143		1.748			
リーディング	前	4.286	-1.286	1.139	-4.225	13.000	0.001
	後	5.571		1.284			
ライティング	前	3.786	-1.286	1.311	-6.624	13.000	0.000
	後	5.071		1.439			

これを裏付けるように、「最も英語の勉強になったのはホームステイ先」と答えた学生と、「学校のクラスメートや先生と授業内外で話すこと」と答えた学生が7人ずつ半々だった(質問30)。

14人のうち11人がスピーキングが最も伸びたと感じており、理由は以下のものがあった。(類似した内容は省いた 質問13)。

- * 常に外国人の友人と会話をする努力をしていたため。
- * とにかく話す機会が多かった。
- * 学校でも家でも話すので日本ではできない貴重な体験でした。また、ホストマザーが英語教師だったこともあり発音を度々直されるなど、私はとても恵まれた環境でした。
- * ホームステイというのもあったし、自分の意見を話さないとコミュニケーションを取ることも難しかった。
- * ホームステイ先は（中略）話すスピードが速かった。最初は6割しか分からなかったが、後半は9割分かるくらいまでなったのには自分でも驚き（中略）聞くのも話すのも楽しくて仕方がなかった。

一番伸びなかったのはリーディングとライティングが半数（7人）ずつで、理由には、以下の回答があった（質問14）。

- * 話すことばかりを考えていたから、日本でできるリーディングの勉強には力を入れなかった。
- * 日本のようなリーディングの授業があまりなかった。
- *（リーディングは）全体的に授業カリキュラムで重視されていなかったと思う。
- * 書く事をあまりしなかった。授業でもあまり取り上げられず、生活の中でも使うことが殆どなかった。
- * 文法は基本的なものばかりだった（のでライティングが伸びなかった）。
- * ライティングは授業で時間を取らず宿題として出たが、私は宿題をあまりやらなかった。

語学学校に対する意見については（質問15～22）、全体的に満足できるものだったことが数字から見取れる。学校の授業スケジュールには14人中9人が5段階の5、5人が4を示し、満足できるものだったと答えている。また、授業や教員の教え方にも14人中11人が5段階の5、3人が4を選び、満足度を示している。さらに、扱ったトピックや教材についても10人が最高レベルの5、3人が4、1人が3と答えており、レベルも丁度良かったと答えた学生が最も多い9人だった。

しかし日本人学生が多かったことは数人が言及しており、「休み時間に日本人のコミュニティーを作って日本語で会話してしまい、外国人のクラスメートが可哀想だった」という意見があるほどだ。また、「日本人が多く不安だったが（中略）向上心の強い、積極的な日本人ばかりでむしろ刺激を受けたくらいだ」という前向きな意見もある。

アンケート：文化体験

異文化体験については、英語学校でもホームステイ先でも「非常に驚いた」と回答する学生が1人いるものの、余りなかったと答えている学生ばかりである（質問23～29）。但し、以下の記述がある。

- * 日本のように物を置きっ放しにしてはいけないと注意されたので、とても気を使った。
- * ロシアの人が、マイナス30度なんて普通だよって言ったこと（に驚いた）。
- * 日本人の謙虚さがわかった。
- * 日本より虫が大きくて、退治するのに一苦労だった。
- * 毎朝、毎晩、おはようとおやすみのハグ（に困った）。
- * 食事は毎日ワンプレートで、お祈りをしてから食べていた。
- * ホームステイ先の毎日の食事（内容）が似ていると感じた。

コミュニケーションスタイルの違い（質問32・33）についても余り意識した様子がなく、コミュニケーションギャップ（質問34・35）も余りなかったという回答が多い。しかし、宗教の話題は出さなかった、自分の意見は明確に発言するようにした、Yes/Noをはっきり言った、と会話での態度を順応させていた学生の様子も窺える。加えて、「何故日本人はもっと積極的に話さないのか」と言われたり、「本当に理解しているのか」と尋ねられたり、日本人学生の曖昧な会話スタイルを外国人の学生に指摘されたというコメントもある。

最後に留学後の自分自身の変化について（質問38・39）は、5段階で3の中程度と答えた学生が3人いるものの、4、5の高いレベルの変化があったと回答したものが11人と多い。また、留学の経験を活かしたい、役に立てたい（質問40・41）と、強く思うと答えた学生が12人と、殆どの学生が大いに影響を受けた様子である。具体的な回答は、「英語に対する苦手意識がなくなった」、「（英語の）勉強をすることへの意欲が大きく変わった」、「もっと外国語を使えるようになりたい」、「将来英語関係の仕事につきたいという気持ちが強くなった」、「外国人とかかわるボランティアなどに積極的に参加していきたい」等、語学習得に対する意欲と抱負を述べる意見が殆どである。英語力を上げることを第一の目標とし、留学の効果があったことが窺える。

6. まとめ

5週間という短い期間ではあったが、留学の効果を十分に確認することができた。語学学校での海外からの友人や一緒に暮らしたホストファミリーとの新しい出会いが学生に刺激を与え、学生たちは歯がゆい思いなどを繰り返しながらも成長した様子が窺えた。特に英語スキルに関しては、毎日英語と格闘し、伸長を自分自身で強く感じることは今後の学習につながっていく。言語学習における motivation 研究の第一人者である Dörnyei (2009) は、“ideal self” と “ought-to self” が強い動機になる、としている。つまり、その言語を使用している未来の自分自身のイメージが強いと、自発的なものでも外から望まれたイメージでも、現在の自分自身とかけ離れていても、それが学習動機になる、と述べている。友人と再会する約束や、英語で「恩返し」を望む気持ち、将来の自分のキャリアに英語を結びつける意識がある限り、日本に戻っても学習を続けると思われる。

英コミの留学体験とはこの刺激の点で差がある。金子・高味 (2009) は5ヵ月留学組の80%が「協調性」の点で最も成長したと感じている、と報告したが、ICTE-UQ 留学の学生たちは、協調性よりも意思表示をし、自分を表現することに努力をした。「朝から晩まで英語漬け」という回答があったことも、刺激の多さを示している。

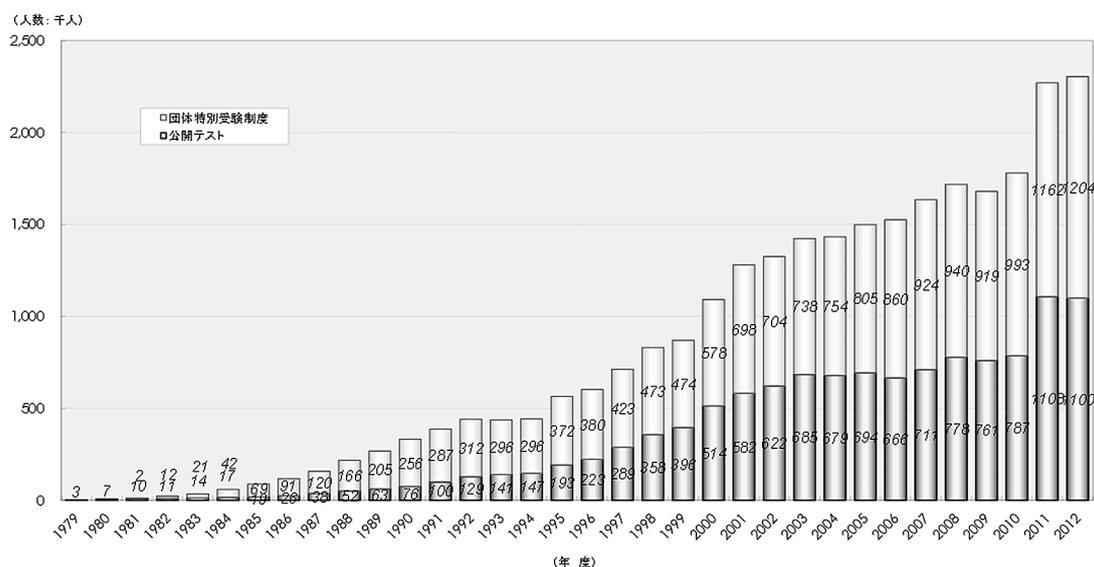
この点で ICTE-UQ 留学の学生たちは恵まれた環境にいたことも特筆すべきであろう。Tanaka (2007) は、オークランドの語学学校に留学した日本人学生の第二言語接触体験を、学校もホームステイも期待はずれであった、と報告している。12週間の留学中に課した週1回の日記提出と留学後のインタビューからまとめたものだが、ホームステイ以外の現地の友人ができた学生は29人中2人、ホームステイを行った18人のうち6人(33%)だけがホームステイ体験を評価し、9人(50%)はマイナスの評価、というものである。ホームステイ先の家族との折り合いがうまく行かず別の家族に移ったり、ホストマザーが学生と話す際に非協力的な態度を取った (host mother was not cooperative and even looked displeased p. 45), という意見も紹介している。Tanaka (再掲) も指摘しているように、今後も留学を満足のいくものとするよう、ICTE-UQ には信頼のおけるホームステイ先の確保を

願う。また、留学準備として、学生にホームステイ家族に対する心得や応対を指導しておくことも一案と思われる。

国際性

UQ のホームページには「130 カ国を超える 11,300 名の留学生が」学んでいる、とあり、学生の多様性が窺える。更に ICTE-UQ のホームページは、日本語、中国語、韓国語、アラビア語、スペイン語など、英語以外に 12 カ国語で記載され、「35 カ国を超える国からの留学生 500 名以上と共に学ぶ機会」があると、豊かな国際性を宣伝している。但し、上述したように日本人学生の割合が高く、語学プログラムには「600 人以上が参加していたが、殆どが日本人だった」という学生の記述がレポートにある。この一因として、日本の学生には 2 月中旬から 5 週間のコースは学年末であり、短期留学に都合が良いことが挙げられる。また、一クラスあたりの日本人が多い理由として、習熟度別クラス分けテストの結果が似た傾向を示し、日本人学生が同程度のレベルに集中しやすいことが挙げられる。ICTE-UQ には偏りのないクラス編成を望むばかりだが、日本の大学側も、日本人学生が少ない時期を狙って留学コースを組むなどの対応を考えることも必要となろう。

今後、東京オリンピック 2020 年の開催や TPP の行く末を待つまでもなく、英語を使用する機会は増えると予想される。現実に英語学習熱はとどまる様子を見せない。例えば、TOEIC® の受験者は図 4 に示すように激増し、運営する国際ビジネスコミュニケーション協会のホームページによると 2012 年には「年間約 230.4 万人が受験」しているとのことだ。

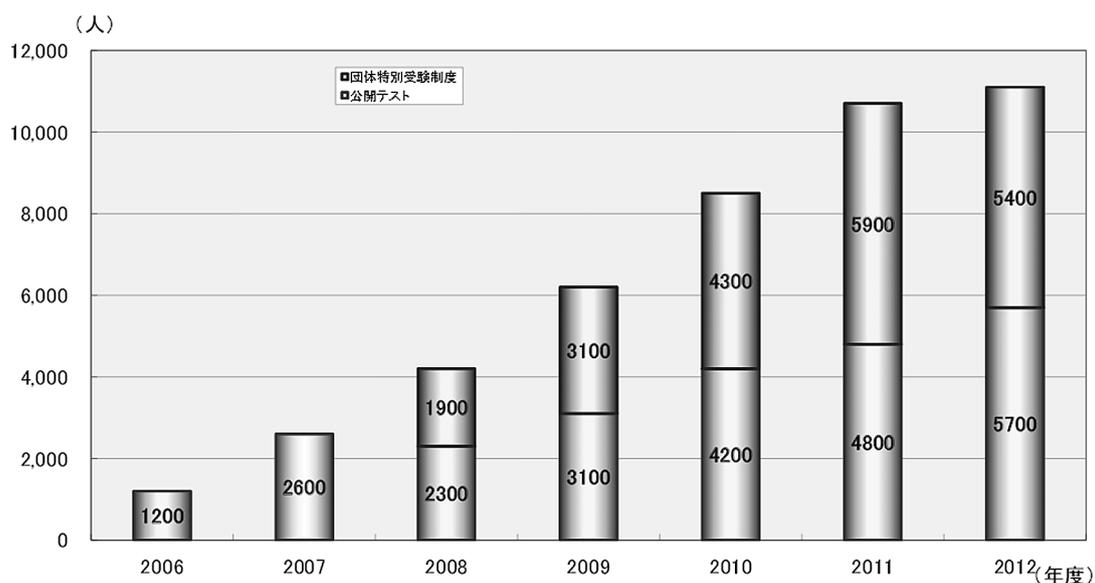


一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2013)

図 4. TOEIC® (LR テスト) 受験者数の推移

しかしながら、テスト対象であるリスニングとリーディング (以下 LR) の受身の英語力だけでなく、実際の使用にはコミュニケーション能力が求められる。机上のテスト対策だけでない、実践的な適応力を高めてこそ「使える英語」と言えるだろう。対話適応能力を測るテストとして、TOEIC® は 2006 年からスピーキングとライティング (SW) 力を測るテストを開始しているが、その受験者は

2012年度でも11,000人余りである。図5は受験者数を表したものであるが、LRのテストが、開始から7年後には10万人を超えているのと比べて受験者も増え方も少ない。



一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2013)

図5. TOEIC® (SW テスト) 受験者数の推移

年間の公開テストの回数や受験の形態が違う (SW テストにはコンピュータを使用する) ことを考慮しても、発信力を試すことにはそこまで積極的になれない受験者の姿勢が見える。日本の英語教育と受験体制がLR力の開拓と試験に傾いているせいもあるだろうが、これはまた、冒頭で述べた「若者の内向き志向」と相通じるものがあるのではないか。さらに言えば、若者だけでなく、実は日本文化の特徴として「内向き志向」があるのではないだろうか。選択肢のあるテスト (LR) は失敗を恐れなくても良いが、マイクの前でスピーチやメッセージを残したり、小論文を制限時間内に仕上げるプロダクティブ能力を測るテスト (SW) はリスクが大きい。各自がコミュニケーション能力の開拓に興味を示し、その能力を測りたい日本人が増えてくれば、SW テスト受験者も増えることと考えられる。

留学は異文化接触だけでなく、自律性や問題解決能力の開発にも効果があることは、学生のコメントから明らかである。衝突や失敗、リスクがあるからこそ、得るものも大きいのだろう。前向きな姿勢を教員の私たち自身が持ち続けると共に、学生には留学を勧め、発信力のある日本を育てていきたい。また、英語教員として異文化理解を深めると共に、コミュニケーション力を高められる授業作りを目指したい。

参考文献

- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4), 13-23.
- Brecht, R. D., Davidson, D. E., & Ginsberg, R. B. (1995). Predictors of Foreign Language Gain During Study Abroad. In B. F. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp. 37-65). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

- Brecht, R. D., & Robinson, J. L. (1995). On the Value of Formal Instruction in Study Abroad: Student Reactions in Context. In B. F. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp. 317-334). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Coleman, J. A. (1997). Residence abroad within language study. *Language Teaching*, 30, 1-20.
- Cook, H. M. (2006). Joint Construction of Folk Beliefs by JFL Learners and Japanese Host Families. In M. A. DuFon, & E. Churchill (Eds.), *Language Learners in Study Abroad Contexts* (pp. 120-150). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z. (2009). The L2 Motivational Self System. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 9-42). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- DuFon, M. A., & Churchill, E. (2006). *Language Learners in Study Abroad Contexts*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Freed, B. F. (1995). *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Freed, B. F. (1998). An Overview of Issues and Research in Language Learning in a Study Abroad Setting. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 4, 31-60.
- Huebner, T. (1995). The Effects of Overseas Language Programs: Report on a Case Study of an Intensive Japanese Course. In B. F. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp. 171-193). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Iino, M. (2006). Norms of Interaction in a Japanese Homestay Setting: Toward a Two-way Flow of Linguistic and Cultural Resources. In M. A. DuFon, & E. Churchill (Eds.), *Language Learners in Study Abroad Contexts* (pp. 151-173). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Kitao, S. K. (1993). Preparation for and results of a short-term overseas study program in the United States. 『同志社女子大学総合文化研究所紀要』10号, pp. 107-118.
- Marriott, H. (1995). The Acquisition of Politeness Patterns by Exchange Students in Japan. In B. F. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp. 197-224). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- McMeekin, A. (2006). Negotiation in a Japanese Study Abroad Setting. In M. A. DuFon, & E. Churchill (Eds.), *Language Learners in Study Abroad Contexts* (pp. 177-202). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Midorikawa, H., Robson, G., Sugihashi, T., Wakabayashi, S., McCarthy, J., & Griffith, T. (2009). Research into the efficacy of partial emersion: The output of good language learners and their speaking proficiency. (Japanese government Grants-in-Aid for Scientific Research Report No. 18520453).
- Polanyi, L. (1995). Language Learning and Living Abroad: Stories from the Field. In B. F. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp. 271-291). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Robson, G., Midorikawa, H., Sugihashi, T., Wakabayashi, S., McCarthy, J., & Griffith, T. (2007). Individual learner differences and proficiency. 『学苑』802号, pp. 47-60. 昭和女子大学近代文化研究所.

- Siegal, M. (1995). Individual Differences and Study Abroad: Women Learning Japanese in Japan. In B. F. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp. 225-244). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Sugihashi, T. (2009). Culture shock and adjustment of Japanese female college students in & after study abroad program. 『学苑』 822 号, pp. 42-66. 昭和女子大学近代文化研究所.
- Tanaka, K. (2007). Japanese students' contact with English outside the classroom during study abroad. *New Zealand Studies in Applied Linguistics*, 13(1), 36-54.
- Tanaka, K., & Ellis, R. (2003). Study-abroad, language proficiency, and learner beliefs about language learning. *JALT Journal*, 25(1), 63-85.
- The University of Queensland: UQ International. (2013). Why choose UQ? Retrieved December 13, 2013, from <http://www.uq.edu.au/international-students/why-choose-uq>
- The University of Queensland: Institute of Continuing & TESOL Education (ICTE-UQ). (2013). General English. Retrieved December 13, 2013, from <http://www.icte.uq.edu.au/general-english>
- The University of Queensland: Institute of Continuing & TESOL Education (ICTE-UQ). (2013). The ICTE-UQ Advantage (日本語). Retrieved December 13, 2013, from <http://www.icte.uq.edu.au/about-icte-uq-japanese>
- 金子弥生, 高味み鈴 (2009) 「英語コミュニケーション学科ポストプログラムに関する報告: 学生アンケートと TOEIC スコアの推移を通して」 『学苑』 821 号, pp.137-149. 昭和女子大学近代文化研究所.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2013) TOEIC® テスト受験者数の推移. 12/13/2013 http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/toeic/pdf/about/transition.pdf
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2013) TOEIC® スピーキングテスト/ライティングテスト受験者数の推移. 12/13/2013 http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/sw/pdf/transition.pdf
- 文部科学省: Education at a Glance. (2013) 「日本から海外への留学者数の推移」 9/7/2013 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/_icsFiles/afieldfile/2013/02/08/1330698_01.pdf
- 社団法人日本私立大学連盟学生委員会 (2011) 『私立大学学生生活白書 2011』 東京
- 首相官邸 (2013) 「日本再興戦略: JAPAN is BACK」 6/14/2013 http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf
- 八島智子 (2004) 『第二言語コミュニケーションと異文化適応—国際的対人関係の構築をめざして』 東京: 多賀出版
- 吉村紀子, 中山峰治 (2010) 『海外短期英語研修と第 2 言語習得』 東京: ひつじ書房

付 録

アンケートの全質問と選択式質問の回答結果

1. 先ず英語学習についての皆さんの様子について質問します。コースに参加する前のライティングはどの程度だったと思いますか。
2. 参加後のライティングのレベルはどの程度でしたか。
3. コースに参加する前のリーディングはどの程度だったと思いますか。
4. 参加後のリーディングのレベルはどの程度でしたか。
5. コースに参加する前のスピーキングはどの程度だったと思いますか。
6. 参加後のスピーキングのレベルはどの程度でしたか。
7. コースに参加する前のリスニングはどの程度だったと思いますか。
8. 参加後のリスニングのレベルはどの程度でしたか。
9. 授業中はできるだけ話すようにしましたか。

1 - 余りしなかった	(回答者数) 0
2	0
3	0
4	3
5 - できるだけ努力した	11
10. 宿題や課題を全てこなしましたか。

1 - 余りしなかった	(回答者数) 0
2	2
3	3
4	3
5 - できるだけ努力した	6
11. 予習や復習をしましたか。

1 - 余りしなかった	(回答者数) 0
2	1
3	2
4	8
5 - できるだけ努力した	3
12. わからない時は、クラスメートや先生に質問しましたか。

1 - 余りしなかった	(回答者数) 0
2	0
3	0
4	5
5 - よく質問した	9
13. 4つのスキルの内、どの力が一番伸びたと思いますか。考えられる理由と併せてお答えください。
14. 4つのスキルの内、一番伸びなかったのはどの力だと思いますか。考えられる理由と併せてお答えください。
15. 次に英語学校について質問します。全体的な授業スケジュールは満足できるものでしたか。

1 - 不満	(回答者数) 0
2	0
3	0
4	5
5 - 満足	9
16. 先生たちの教え方や授業の様子は全体的に満足できるものでしたか。

1 - 不満	(回答者数) 0
2	0

3	0
4	3
5 - 満足	11
17. 授業で扱ったトピックや教材は満足できるものでしたか。	
1 - 不満	(回答者数) 0
2	0
3	1
4	3
5 - 満足	10
18. 授業のレベルは自分に合っていましたか。(複数回答あり)	
かなり易しかった	(回答者数) 0
易しかった	3
丁度良かった	9
やや難しかった	3
かなり難しかった	0
19. クラスの人数とそれぞれの出身国はどうでしたか。偏りがなく丁度良かったですか。	
人数も出身国も丁度良かった	(回答者数) 1
人数は良いが日本人が多かった	13
人数も多く、日本人も多かった	0
日本人は少なかったが、もっと少人数クラスが良かった	0
もっと日本人がいて欲しかった	0
20. 英語学校の授業や活動に参加することは、日本と違う文化を理解する上でどのくらい役に立ちましたか。	
21. 上記(20番)の理由も含めて具体的にお答えください。	
22. 英語学校の授業や活動の内、嫌だったことや困ったことはありましたか。	
23. 英語学校の授業や活動で、どの程度のカルチャーショックがありましたか。	
1 - 余りなかった	(回答者数) 5
2	3
3	2
4	3
5 - 非常に驚いた	1
24. 上記(23番)の理由も含めて具体的にお答えください。	
25. 次にホストファミリーについて質問します。ホームステイ先で驚いたことや困ったことはありましたか。	
26. ホームステイの経験はどの程度良かったですか。	
27. 上記(26番)の理由も含めて具体的にお答えください。	
28. ホームステイ先でどの程度のカルチャーショックがありましたか。	
1 - 余りなかった	(回答者数) 7
2	1
3	4
4	1
5 - 非常に驚いた	1
29. 上記(28番)の理由を含め、具体的に(カルチャーショックがあったとしたらどんなものだったか)お答えください。	
30. 一番英語の勉強になったのは次のどれですか?	
英語学校の先生と授業中話すこと	(回答者数) 1
英語学校のクラスメートと授業中話すこと	1
英語学校のクラスメートと放課後や授業以外で話すこと	5
ホームステイ先で家族と話すこと	7

ホームステイ先で同じステイ先の友人（ホストメイト）と話すこと 0

31. 上記（30番）について簡単に説明してください。
32. オーストラリアは民族や人種が様々ですが、そのために日本では感じることはないコミュニケーションスタイルを使用しましたか。
- | | |
|-------------|----------|
| 1 - 殆どしなかった | (回答者数) 5 |
| 2 | 0 |
| 3 | 4 |
| 4 | 3 |
| 5 - 非常にした | 2 |
33. 上記（32番）の理由を含めて具体的に説明してください。
34. 日本人は「以心伝心」「空気を読む」などと言われますが、自分の意見を明確に言わなかったために、コミュニケーションギャップがありましたか。
- | | |
|------------|----------|
| 1 - 余りなかった | (回答者数) 6 |
| 2 | 2 |
| 3 | 3 |
| 4 | 3 |
| 5 - 多くあった | 0 |
35. 上記（34番）の理由を含めて具体的に説明してください。
36. 5週間で日本語を使用する機会はどの程度ありましたか。
- | | |
|-------------|----------|
| 1 - 余りなかった | (回答者数) 0 |
| 2 | 1 |
| 3 | 5 |
| 4 | 7 |
| 5 - たくさんあった | 1 |
37. 上記（36番）を具体的に説明してください。
38. 5週間の異文化での生活で自分の中にどの程度の変化がありましたか。
- | | |
|----------------|----------|
| 1 - 余り変わらなかった | (回答者数) 0 |
| 2 | 0 |
| 3 | 3 |
| 4 | 6 |
| 5 - 変わったと強く感じる | 5 |
39. 上記（38番）の理由も含めて具体的に書いて下さい。
40. 今後この経験を活かしたり、役に立てたいと思いますか。
- | | |
|-------------|----------|
| 1 - それ程思わない | (回答者数) 0 |
| 2 | 0 |
| 3 | 0 |
| 4 | 2 |
| 5 - 強く思う | 12 |
41. 上記（40番）の理由も含めて具体的に書いてください。
42. 参加する前の情報で最も役に立った情報は何ですか。或いは行く前にあったら良かった、と思う情報やガイダンスはありますか。理由も併せて書いてください。

(すぎはし ともこ 英語コミュニケーション学科)
(クリスティー・セージ 英語コミュニケーション学科)
(みやふさ すみこ 英語コミュニケーション学科)